

いよ／＼近日中に正式辞令が下付され次第、本月中にも直ちに先発隊一行は現地へ赴き所定の活動を開始する見込で、こゝ数日間の研究所の動きは赤松教授初め各研究員共極めて活発化してゐる。

既に先月二十三日（金）には午前十時から職員集会所において赤松教授を始め研究所員全部が出席し南方調査方針に関する打合せ会を行ったが今日この頃の研究所の状況はたゞもう出発前の慌たゞしさにとりつかれた形で各方面との往来頻繁を極めてゐる。

研究所の動き

研究報告会

◇十月五日（月）午前十時より職員集会所において、『満州小麦の発達史』小林政一氏

◇十月九日（金）午前十時より一橋講堂において、『外南洋の環境要素と地位』石田龍次郎氏

◇十月十三日（火）午後一時より一橋講堂において、『敵産煙草事情』

阿部源一氏

商学会

商学会では先月十九日（月）午後六時三十分から如水会館において川島信太郎氏の満支視察談を聴いた。

講演会

東亜経済研究所では先月中に次の如く三つの講演を聴取した。

一、十月十二日（月）午後一時から一橋講堂において、『南方政策に関する諸問題』外務省南洋局第二課長東光武三氏

二、十月十三日（火）午後一時から如水会館において、『拓務省拓南局

長条重千夫氏の南方談

三、十月二十八日（水）午後六時三十分から如水会館において榊原中尉より南方事情を聴く

統制機構特殊問題委員会

統制機構特殊問題委員会では発足以来の鉄鋼統制の研究から石炭統制の研究に焦点を向けることになつたが、去る二日如水会館において石炭統制会から茂野吉之助氏（明三五）並に長岡孝氏（六七）を招いて講演をきいた。

第三五六号（昭和十七年十一月十日）

(33) 研究所大陸進出の基礎成る

現地三要地に出張所

調査に基金食込みも考慮

高瀬学長帰朝談

創業の日なほ浅き本学東亜研究所に、更に大陸へ進出の足場を求めべく、本秋十月十七日東京発満支旅行を試みた高瀬学長は、各地如水会支部ならびに現地関係諸機関の多大の支援を得てはゞ所期の目的を達し、約五十日に亘る旅程をおへて去る五日十六時十分東京駅に到着した。現地出張所設置は研究所がいよ／＼実地研究にのり出したことを示すものとして一大躍進と称せらるべく、なほ山積する問題を通して今後の方針をいかに持するか、帰朝にあつて高瀬学長は大略次の如き談話を発表した。次の諸点は注目さるべきであらう。即ち一、

現地諸機関は有力なる出張員を求める。換言すれば、現地研究調査にはなほ理論が欠乏し、その本学研究所に多大の期待がよせられること、二、本学研究所は現地駐在員を設置することにより、現地諸調査機関と連絡、各機関の行ふ研究調査の資料を入手し得る便を得たこと、三、現地駐在員は出来得れば早々本学より派遣して仕事に着手をいそぐこと、四、もし有効なる仕事が発見し得た際には基金を消費して、も、大々的な研究調査を行ふ意志があること、なほ所員の拡充は可及的に早く行ひたい、等と見られる。

新京・北京・上海に駐在

今回の旅行の主たる目的は在滿支各研究調査機関と連絡を取り、新京、北京、上海等現地経済界の中枢地にある既存諸調査機関内に本学研究所の出張所を設置、一、二名の研究員を常置することによつて、該地各調査機関の行ふ調査研究の結果をまとめること及び将来研究所が現地において特殊な調査を行ふ為、かなり長期に涉つて若干名の所員を派遣する際その足場たらしめるところにあつたが、現地各調査機関より甚だ積極的な協賛を得、所期の目的を達したと思ふ、即ち新京出張所、滿州方面に関しては滿鉄調査部新京支社では、目下増築中の建物が来年度完成した暁には支社内に一室本研究所に提供し、諸研究所の行ふ諸調査に関する連絡の便をはかる旨確答を得た。

新京出張所、華北政務委員会の指導の下に北支開発調査部を主体現地各調査機関を統合し最近設立された華北総合調査研究所が目下滿鉄北支経済調査部の有力な協力機関となつてゐるが、王蔭泰所長、伊沢道夫副所長等の骨折にて同研究所敷地たる元燕京大学の建物内の一室を

得、調査の便を受けることに話がまとまつた。なほ該研究所側の強い希望として現地駐在員に大学教授級の所員を置き、調査開始間もない該研究所の事業等の企画等について積極的な実地指導を受けた旨申し入れがあり、しかも出来得べくんば、来春早々にも派遣されたいとのことであつた。

上海出張所、予定によれば、東亜同文書院内に設置する筈であつたが、出張講義をかねた駐在員を望む先方との話合がつかず、一先づ保留することになつた。かて、加へて、同書院は上海市内よりかなり離れ、現地経済界の中枢とのたえざる連絡を要する出張所の位置としては不適であるため、この問題は改めて考へたいと思ふ。

現地進出の可能性

現在研究所の主力は南方研究に集中するといへ、大東亜共栄圏建設に對する理論を探索すべき本研究所としては、滿支一帯にわたる諸地域の研究は依然統行しなければならず、また南方調査の方向が一応決定すれば、その方向に振り向けられた所員も可及的に滿支に振り向け得るであらう。また本学研究所の大陸進出に関しては現地側の要望に見られるごとく、多少乱立の嫌ひがある。現地諸調査機関の業跡に理論的な統一をあたへるものとして強く期待されてゐるのであり、現状はまた本学研究所の建前たる、現実の動きに則してそれに理論的な統一を付与するが如き方向が充分有効な状態である様に思はれる。

例をとれば、現に北支で行はれてゐる経済統制の如きも、その実施にあつて、日本内地における統制経済の経験をもち來つて無雜作に北支にも適用せんとする嫌があり、かくて、日本人のみ統制して、支那人

の間には及ばぬ、といふ結果を来すことも考へられる。従つて将来、この配給、集買機構に關しても鋭利な理論の目がむけられることは實際上からいつでも絶対必要なことはいふまでもなくまた去年十二月在上海の敵性資産を接収した際押へた大商店、大銀行の書類中には百数年にさかのぼるものもあり、米英東亞侵略の実状を調査するに貴重な資料であるが、高度の理論を要求するために未だ調査に着手されてゐない。これとても将来わが研究所の進出する方向たり得ると思ふ。なほ、現地は今日なほ軍政的な色彩濃く、各研究所調査部の行ふ調査等はほとんど軍依頼のものであるため、重要な資料にして入手がたいものが多いが、今後、陸軍省と連絡をとつてこの方面の開拓を行ひたい。また所員が軍囑託として実地調査に加はり、その資料を確保することも考へられる。

研究所今後の方針

前にのべた如く、現地諸調査機関では研究所の大陸進出をすこぶる積極的に期待し援助する気運にあるが、現地で求める駐在員としては華北総合調査研究所の例にも見られる如く、大学教授及至は助教授にして、調査連絡をかねて現地諸機関の指導をも行ひ得る有力なスタッフであり、かつまた実際に駐在員の設置は当方先方ともかなり焦眉の問題となつてゐるため、来春三、四月頃までに派遣は実現したいと思ふし、又特に急ぐ北京駐在員は、出来得れば来春早々までにでも実現したい希望を持つてゐる。

しかし一方研究所としては現在南方経済圏の調査研究にほとんどその主力を集中しなくてはならないため、スタッフの不足が目立ち、ここ

に矛盾が存するわけであるが、万一現研究所々員中に適当人選が行ひ得ないならば、研究所に關係を持たぬ本学教授中より選んででも派遣したいと思ふ。

なほ創設未だ日の浅い本学研究所が量的にいつてスタッフの不足をかこつのはやむを得ないが、研究所員からの養成を目指すのはかなり長年月を要するため、適当な人材さえ見出せば、当分の間は例へば各高商教授中より抜いて所員を充実する手段も考へてゐる。何はともあれ、研究所創設の際公表された所員三十名の理想は可及的に早く実現させたい氣持である。

基金使用の方法

調査成果の理論的な統一整理を標榜する本研究所以来の目的からいへば、財団基金利子ならびに文部省補助合せて約三十万円の予算に不自由は感じられてゐないが、寄付者たる如水会員の意向は、今後適當なる事業が発見出来た際、収入を基金利子にのみたよるが如き姑息な態度を一擲して大々的にこれを行ひ、基金の如き、二、三十年のうち消費するも、意に介せずともよし、収入の件はその時に至つて改めて考ふべし、等の積極的な意見があり今後、研究所側としてもこの方針に従つて大胆細心に研究調査を進めてゆきたいと思ふ。

現地囑託候補に重野吉夫氏

従来研究所が現地に置いた囑託は他に公務を帯びたひとに依囑し、単に本研究所よりの依頼によつて連絡或ひは資料の整理等を行ふにすぎず、積極的な仕事は期待しがたいため、今後研究所スタッフが拡充さ

れると、もにこれに代るべきものであるが、会長今回の渡満支に当り、新たに囑託を求めることはなく、僅かに上海商工会議所、重野吉夫氏がその候補にのぼるにとゞまつた。

研究所の保護育成に

現地如水会の熱意

学長汪主席と会談

先に如水会の絶大なる後援を得て創設された東亜経済研究所は、その後一橋経済学に新生命を拓くものとして、如水会員全体の一致した後援をうけつゝあるが、今日更に研究所の現地進出の途をひろくべき任をもつて行はれた学長の五十日に亘る満支旅行にも、到るところ多大の便宜と支援をうけ、研究所の将来の多幸なることを思はせた。

即ち、満支一帯に亘り、経済上拓要の地に如水会支部の設けられざる所はなく、各支部において盛大なる歓迎会が開催され、前後を通じて学長の出席した歓迎会の数は、 \square 回(不明)に及ぶといふ盛況は他に比類のない所であり、中でも半日の出張見学に、なほ歓迎昼餐会を開いてむかへた撫順支部、あるひは学長の帰途を要して、旅程の一日延期を強つて要求し、歓迎会を行つた下関支部等の熱意は、研究所に対する如水会員の期待の程を如実に語るものといへよう。

又学長の現地関係諸機関との交渉にあつても、常に如水会員中の有志が蔭に陽に連絡の便をはかつたことも忘れてはならないことであり、あはたゞしい旅の交渉にもかゝらず、ほゞ所期の目的を達し得た事に対し負ふところ甚だ大であるとは学長の言であつた。

更に現地視察をかねた学長の渡満支に、短時間に現地の全貌を伝ふべ

く、新京如水会支部の有志が新京中銀クラブにて一日、同地主要経済各機関の主脳部数名を集め、各々二、三十分ずつ現状の説明を行ひ、又それを伝へ聞いた上海支部の有志も又同地経済界の主脳部約十名を日本クラブに会し、矢張り同じく、現地の現状について説明を行ふ等、如水会の協力には余す所がなかつた模様である。

先発隊、某要衝に安着

大東亜共栄圏確立に現今ますますその重要性を加へる南方経済圏に、創業の基礎漸く固まらんとする本学東亜経済研究所が、ほとんどその全主力をあげて、調査のメスを振はんとしてゐることは本紙先々号に報ぜられたごとくであつたが、近く現地調査におもむく所員中の一部たる、杉本、山中、高橋、小田橋の四教授が先発隊となり○月○日全学の期待をあつめつつ飛行機にて出発、○日南方某要衝に安着した旨公電があつた。なほ同先発隊は近く本隊と合し、所定プランに従つて直ちに研究に着手する手筈になつてゐる。

第三五八号(昭和十七年十二月十日)